

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 飯島 渉

本論文は、中国における伝染病の歴史を一次資料に基づいて克明に追跡し、伝染病への対策を通して見た衛生事業の「制度化」の過程を明らかにした。そして、この過程とそこに現れた社会的変化の相互作用を「近代性」を実現する過程として導き出すという、従来になかった中国近代史研究ならびに東アジア近代史研究に関する新しい方法的な地平を切り開いた。

本論文は、19世紀末から1930年代にいたる中国における衛生事業の基礎をなした伝染病の発生と流行状況を確認し、特にペストの流行に関する中国社会の対応を跡付け、衛生事業の「制度化」が20世紀初頭の中国社会さらには東アジア・東南アジアの国際秩序に与えた大なる影響を検討した。

衛生事業が「制度化」されていく過程から近代中国の軌跡をたどる時、日本を初めとする植民地主義的な中国進出の中で展開された衛生行政に対して、中国は1930年には検疫権を回収し、対外的に衛生行政を整備した。この過程は、「衛生」に含意された近代的な価値観を中国社会が導入する過程であったといえる。即ち、従来は経済発展や政治改革として議論されることが多かった「近代化」問題を、植民地的衛生事業と、それに様々に対応する中国社会との複合的関係として、衛生事業の展開に見られた「近代性の構造」が、近代中国社会の形成に大きな影響を与えたことが分析される。

本論文の第一の特徴は、伝染病という主題を通して、中国ならびに東アジアにおいて、それ以前とは異なる開港場を中心とした社会関係と地域間関係が登場したことを明らかにしたことにある。日本の近代中国史研究において最初の本格的な都市疫病史研究の成果であり、新たな近代社会史研究の視野を提示した。

第二の特徴は、日本の東アジアにおける伝染病への対応を通して、日本と中国並びにアジアとの関わりが、どのように形成されたかという点を克明に明らかにしたことにある。この日本とアジアとの関わりは、従来、植民地化ならびに對外膨張として論ぜられてきたのではあるが、本論文は、日本の伝染病行政を跡付けることを通して、アジアとの関わりを制度化して行こうとする試みが分析され、中国の都市形成と社会形成が、日本の政策的関わりという視角から明らかにされた。

第三の特徴は、現存する第一次資料をシンガポール、香港、台湾、日本、中国において広く収集し、その資料を徹底的に分析して日本とアジアとの人的かつ組織的な関わり方を具体的に明らかにした点にある。その中では、「疫病観」や「清潔観」などによって日本のアジア観またアジアの日本観をも検討できる歴史資料を発掘している。

このようにして、中国近代史の研究史上画期的な伝染病に関する研究成果であり、さらに日本とアジアとの関係、またアジアの地域間関係の特徴を明らかにする東アジア近代史研究の方法においても、今後の研究課題を示したと評価できる。

一方、本論文の問題点として、本テーマに掲げられた社会変容について、近代的な衛生行政の基礎となる組織化、規律化という面では、衛生事業が依然として旧来の民間団体によって担われており、衛生事業の「国家化」は、本稿が対象とした時期においては実現しなかったと指摘されている。また、疫病問題を通して変革される衛生観念や、伝統的な医療や習慣に基づく自己鍛練としての伝染病防止の考え方など、社会変容を明らかにするためには、より異なる角度からの分析が必要である。したがって社会変容の部分は直接的な分析というより、むしろ制度の変容を通してみた社会分析となっている。しかしこの部分は、まったくテーマを別にして論ずべき領域でもあり、本論文において分析された衛生事業の重要性に関する議論をいささかもそこなうものではない。

本審査委員会は、上記のような画期的な成果をあげていることに鑑み、本論文が博士(文学)の学位に十分に相当するものであると判断する。